

第三十五回 司馬懿病を詐りて曹爽を賺す、諸葛誕義もて司馬昭を討つ

— 魏の権力闘争と呉の混乱 —

(前回から今回まで)

諸葛亮が亡くなると、曹叡(魏の第三代皇帝)は目を東に転じ、司馬懿に遼東で燕王を名乗つて自立した公孫淵の征伐を命じます。

遼東の公孫氏とは、後漢末の争乱に乗じて公孫度が遼東で自立し、韓半島の中国人植民地の楽浪郡をあわせます。その子公孫康の代には、さらに南に進出して現在のソウル近くに帶方郡を設け、公孫氏の勢力は韓半島西南部にまで伸びていきます。

公孫氏の領域は高句麗や辰韓・弁韓・馬韓の三韓と隣接し、その南には日本の倭国がありました。

公孫康の子公孫淵の代になると、魏や呉との抗争が始まります。

司馬懿は征討を命じられるや、諸葛亮との戦いで見せた持久戦法はとらず、電光石火の攻撃でいつきよに公孫淵を滅ぼします(「公孫淵兵敗れて襄平に死す」)。この情勢をみた邪馬台国の

卑弥呼は、この時、魏に使節を派遣してきます（『三国志事典』渡邊義浩氏、大修館書店）。

司馬懿が遼東からもどつてくると、曹叡の病気は重く死の床に臥せていました。曹叡は、司馬懿の手をとって涙ながらに、八歳の太子曹芳の後事を頼みます。その時、幼い曹芳が司馬懿に抱きつくと、曹叡は司馬懿に、貴方を慕う幼子の心を忘れずにいてくれと言ひ残し、曹芳を指さしながら亡くなります。在位十三年、年齢三十六歳でした。曹芳は皇帝位につきませんが、しかし後年、権力を握った司馬氏によつて廃位されてしまいます。

どこかで聞いたような話です。そう、最後を迎えた豊臣秀吉が、徳川家康らを枕元によび、幼い秀頼を指さし、泣きながら後事を頼む場面そのままです。しかし後年、家康は、あきれられるような言いがかりをつけて、豊臣家を滅ぼしています。彼が「狸おやじ」とよばれる所以です。司馬懿は、さしずめ中国版「狸おやじ」といったところで、さつぱり人気がないようです。そして、司馬氏は以降三代にわたつて権力闘争を戦い、着々と篡奪を進めて行きます。

司馬懿のさしあつたてのライバルは、曹叡からともに後事を託された曹爽でした。司馬懿は、「狸おやじ」さながらの老獪な手を使って曹爽をだまします。

(本文抄)

曹爽そうそうは、司馬懿の様子をつかめずにいた。たまたま李勝りしやうが荊州刺史けいしゅうしに任命されたため、曹爽はこれを機に李勝を司馬懿のもとに別れの挨拶にやり、ようすを探らせた。

李勝が司馬懿の邸やしきに出向いたところ、門番の役人が司馬懿に取り次いだ。司馬懿は二人の息子しはし・司馬昭しはしやうに言った。

「これは、曹爽が、私の病気の様子を探りに来させたのだ」

そこで、冠かんむりをはずし髪をふり乱して寝台しやうに上がり、布団にくるまって座り、二人の侍女じしよに体を支えさせてから、李勝を官邸くわんていのなかに請しょうじ入れた。李勝は寝台の前まで来て、挨拶すると、「ずっと太傅たいふにお目にかかれずにおりましたが、なんとこれほどご病気が重いとは思ひもしませんでした。このたび荊州刺史に任命されましたので、お暇いとまごいに参りました次第です」

「并州へいしゅうは北方に近いゆえ、十分に備えをされよ」と、司馬懿はわからないふりをして言った。

「荊州刺史に任命されたのです。并州ではありません」と李勝。

「なんときみは并州から来たのか」と司馬懿は笑った。

「漢水かんすいのほとりの荊州です」と李勝。

「きみは荊州から来たのか」と司馬懿は大笑いしながら言った。

「太傅、たいふいったいどうなされたのですか」と李勝。

「太傅は耳が遠くなられたのです」と左右の者。

「紙と筆を借してください」と李勝。

左右の者が紙と筆を渡すと、李勝はこれに書いて差し出した。司馬懿はこれを読むと、笑いながら言った。

「私は耳が遠くなったのだ。向こうに行かれたら、体を大切にされよ」

言いおわると、手で口を指した。侍女が湯を持って来ると、司馬懿は口をつけて飲むとしたが、襟えりにこぼしてしまい、そのうえで、喉のどがつまったふりをして言った。

「私は老いさらばえて重い病気にかかり、明日をも知れない。二人の息子は出来が悪いゆえ、どうか面倒をみてもらいたい。大將軍（曹爽を指す）に会われたら、どうかくれぐれも二人の息子をよろしく頼むと伝えてほしい」

言いおわると、寝台に倒れぜいぜいと喘あえいでみせた。

李勝は司馬懿のもとを辞去し、もどつて曹爽に会い、逐一ちくいちこのことを報告すると、曹爽は大喜

びして言った。

「その様子では死んだも同然、もう何の心配もない」

司馬懿は李勝が出て行ったのを確かめてから、起き上がって二人の息子に告げた。

「李勝は帰ってから、今のことを報告するにきまっているから、曹爽はもはや私を警戒しなくなるだろう。今度、やつが巻狩りに出るときを待って始末しよう」

(解説)

司馬懿はいったん政治の表舞台から降りましたが、老いさらばえた姿を装って、曹爽をみごとにだまします。だまされたとは知らず曹爽は、「あいつは死んだも同然、もう何の心配もない」といつて喜びます。そして、曹爽を油断させておいて、正始十年(二四九)、ついにクーデタを決行します。

司馬懿は、曹爽が皇帝や自らの取り巻きとともに狩りにでた隙を狙い、兵をあげます。曹爽はうろたえるばかりで、なすことなく司馬懿に降服します。坊ちゃん育ちで遊び好きな曹爽は、老獪な司馬懿の敵ではありませんでした。

司馬懿は、はじめは曹爽に命は助けると安心させておいて、その裏で彼の謀反をでっちあげるや、即座に彼を殺してしまいます。後味の悪さが残る司馬懿のやり口です。ともあれ、敵の目を欺いて雌伏十年、機を見るや一挙に政敵を葬り去りました。こうして、司馬懿が実権をにぎりま

○その後の展開

曹爽の親戚である夏侯霸（夏侯淵の息子）は、自らに危険が及ぶことを恐れ蜀に降服します。蜀の姜維はこれを好機とばかり北伐に打ってですが、魏では司馬懿の長男司馬師がこれに対抗し、ともに勝ち負けがあつた後、双方、引き上げていきます。

嘉平三年（二五一）秋八月、司馬懿は、二人の息子司馬師と司馬昭に後事を託して亡くなります。彼らが引き続き魏の実権を握ります。

そのころ、呉ではお家騒動が続きます。

このとき孫権は、太和三年（二二九）皇帝に即位してからおよそ三十年。すでに四十八歳になつていました。

十九歳で兄孫策のあとを継ぐと、北からの曹操の圧迫をはね返して赤壁で戦い、その後は、あ

るときは蜀と結び、またあるときは魏に臣従するなど、その時々りようてんびんに両天秤にかける行動をくりかえしつつ、情勢判断を誤らずに呉を維持してきました。

まさに、兄孫策そんさくがその死に際し、お前は天下の群雄と雌雄しゆうを決することでは私に及ばないが、能力あるものを任用して江東を保つことではお前の方が上手うわてだと言ひ残しましたが、孫権はその通りの才能を発揮して、呉のかじ取りをおこないます。

しかし、その孫権が、晩年は人が変わったような失政を続けます。それまで孫権を支えた功臣たちがあいついで亡くなつていくなか、孫権の後継者問題が勃発します。

長男孫登そんとうが早逝そうせいすると、孫権は、声望の高い孫和そんわを後継者に指名します。ところが孫権は、孫和の同母弟の孫覇そんぱを気に入つて、孫覇に太子孫和と同じ待遇を与えます。すると、太子が二人いるような状態になり、家臣の間でも孫和派と孫覇派にわかれて対立するようになります。

そして、この混乱に拍車をかけたのが、太子孫和を敵視した孫権の娘全公主せんこうしゆで、孫和を失脚させるべく孫権に働きかけます。

国政の責任者であつた陸遜りくそんは孫権を諫めいさますが、孫権はかえつて陸遜に圧迫を加え、陸遜は憤いきどおりのあまり死んでしまいます。孫和と孫覇両派の争いは泥沼化どろぬまかし、それに嫌悪を覚えた孫権は、

態度を一変させます。孫覇を殺したうえで、孫和も太子の座から降ろしてしまいます。そして、孫権が寵愛した潘夫人が生んだ、八歳の末子孫亮を太子にたてます。しかし、呉の内政はますます混乱の度を深めます。

そして、嘉平四年（二五二）、孫権が亡くなります。時に七十一歳。

孫権の死を聞いた魏の司馬師は、弟の司馬昭に呉に侵攻させます。しかし司馬昭は、呉の將軍しよかつかく諸葛恪に敗れて逃げ帰ります。そして、諸葛恪は蜀の姜維に声をかけるとともに、魏の要衝である新城を包囲します。しかし攻城戦の最中、諸葛恪は額に矢をうけたため、やむなく呉へ帰っていきます。

いつぼう、諸葛恪から誘われた蜀の姜維は、渭水流域の南安へと進撃します。魏は司馬昭を派遣してこれをむかえ打ちますが、双方に勝ち負けがあり兵を引き上げます。

このころ、魏の皇帝曹芳は、司馬氏の専権を憤り、側近と司馬氏打倒を相談しますが、計画は事前に洩れて曹芳は退位させられてしまいます。司馬師は、曹芳に代わり、高貴郷公曹髦（曹丕の孫）を新しい皇帝とします。

そのころ、淮南（淮水と長江の間）に駐屯した毋丘儉と揚州刺史の文欽が、司馬氏の横暴を憤

つて挙兵しますが、文欽は敗れて呉に亡命し、母丘儉も殺されてしまいます。

このとき司馬師は目に瘤こぶができて養生ようじょうしていたのですが、母丘儉と文欽の挙兵をきくと、病氣をおしてみずから出陣します。しかし、病状はますます悪化し、ついに目の玉がとびだして死んでしまいます。弟の司馬昭が後を継ぎ、引き続き政治の実権は司馬氏の手握られます。

○続く姜維の北伐

姜維は、魏の司馬師が亡くなったとの知らせに、今は内政に力を注ぐべきとの声を押し切り、中原を回復すべく北伐に出陣します。

姜維は「背水の陣はいすい」をとつて魏軍を破り、魏軍が逃げ込んだ狄道城てきとうじょうを囲みますが、魏の援軍が到着したため、狄道城の囲みを解きます。姜維はその後、方向を隴西ろうせいに転じて祁山きざんへ向かいます。しかし、祁山には鄧艾とうがいがすでに陣を構えていたので、姜維は南安なんあんを衝つこうとしますが、こちらも鄧艾が伏兵をおいていたため、上邽じょうがいへ向かいます。途中、山が狭まり、けわしい道がつづく「段谷だんこく」というところで、敵の伏兵のために大敗を喫し、姜維は漢中へ引き返ししていきます。

○諸葛誕の反乱

一方、魏へ目を転じると、司馬氏による一連のライバル追い落としが大詰めを迎えます。

諸葛誕は、諸葛亮と同じ琅邪郡の古い家柄である諸葛氏出身で、魏に仕えて順調に出世し、このころ対呉の重要拠点である寿春に駐屯していました。諸葛誕は身の危険を感じ、不安をつのらせていました。司馬氏はここまで、王淩・李豊・夏侯玄・毋丘儉・文欽を次々と打倒し、最後に残った大物が諸葛誕でした。

司馬昭は腹心の賈充に、諸葛誕の腹の内をさぐりにいかせます。

(本文抄)

賈充は(司馬昭から)命令を受けると、ただちに淮南に行き、鎮東大將軍諸葛誕に会った。

諸葛誕はあざなを公休といい、琅邪郡南陽県の出身で、諸葛亮の族弟である。諸葛誕は以前から魏に仕えていたものの、諸葛亮が蜀の丞相だったために重用されず、諸葛亮の死後、重職を歴任して、高平侯に封じられ、両淮(淮北・淮南)地方の総司令官となった。

その日、賈充が兵士を慰労するとの名目で、淮南に来て諸葛誕と会見すると、諸葛誕は宴会を

開いてもてなした。酒がほどよくまわったとき、賈充は諸葛誕にさぐりを入れて言った。

「このごろ、洛陽の賢者たちはみな、天子は懦弱で仰ぐに足りないが、司馬大將軍は三代（司馬懿・司馬師・司馬昭）にわたって国家を輔佐され、その功績と徳義は天をおおわんばかりなので、魏王朝から禪譲を受けられてしかるべきだと考えております。あなたのお考えはいかがですか」
「きみは賈豫州（賈逵）の息子で、父子代々、魏の禄を食んできたにもかかわらず、どうしてそんな不届きなことを口にするのか」と諸葛誕は激怒した。

「私は他人の噂をお耳に入れたまでです」と、賈充は陳謝して言った。

「天子にもし万一のことがあれば、私は命を賭けて恩返しする所存だ」と諸葛誕は言い、賈充は黙り込んだ。

翌日、賈充は帰つてくると、司馬昭に会って一部始終を報告した。司馬昭は激怒して言った。

「小癩なやつめ、よくもそんなことが言えたものだ」

「諸葛誕は淮南の人心を、深くつかんでおります。必ず禍となるに決まっていますから、すみやかに始末されたほうがよいでしょう」と賈充。

司馬昭は詔を持つた使者を派遣し、諸葛誕を司空に任命するから上京せよと申しつけた。諸

葛誕は詔を受けて、賈充が告げ口をしたと察知した。

(解説)

司馬昭は、諸葛誕を表向き司空という高官につけ、その実、彼の兵権を奪おうとします。諸葛誕はここでついに反乱に踏み切りますが、結局、敗死してしまいます。

司馬昭は、諸葛誕の一族を皆殺しにします。捕縛された諸葛誕麾下の兵数百人に、司馬昭が降伏するかと問うと、彼らは、諸葛誕とともに死ぬまでだ、心残りはないと大声で叫びます。司馬昭は一人一人に、降伏した者は命を助けてやるぞと言ったが、一人として降伏する者はありませんでした。一人ずつ殺していきませんが、ついに誰も降伏しなかったと『三国志演義』は書いていますが、これは『三国志』の史実でもありません。

一方、呉の混乱は、孫権の死後も続きます。

孫権のあと十歳の孫亮そんりょう（孫権の三男）が即位しますが、孫氏一族の孫峻・孫綝そんしんがあいついで実権を掌握します。孫峻は、諸葛恪しよかつかく（諸葛瑾の子）を殺すなど専横せんおうの限りを尽くします。孫峻に続いた孫綝も専横をきわめたため、孫亮は孫綝殺害を計画しますが、事前に漏れて孫亮は退位さ

せられます、かわって孫休そんきゅう
孫休の親政しんせいがはじまります。

(孫権の六男)が即位すると、老将ていほう丁奉の協力を得て孫綝を殺害し、